

より当たり前の存在に

学びのカタチ

通信制という選択

④

発信

「通信制を当たり前の選択肢として知ってほしい」。第一学院高校新潟キャンパス（新潟市中央区）2年、斉藤悠和さん（16）は語る。「荒れていそう」「友達ができなそう」「そんな「偏見」をなくしたいと考えている。斉藤さんは、週5日、朝から学校に行く生活が合わないと感じ、「マイペースに通えるのがメリット」の通信制に進学した。だが、「通う高校を周囲に聞かれて『通信制』と答えると、微妙な反応をされる」。どんな学校なのか知られていないと感じ、もどかしかった。



社会人招き交流の機会も



通信制高校を広く知ってもらう活動について話し合う生徒たち＝新潟市中央区の第一学院高校新潟キャンパス

第一学院では、生徒が関心のあることを自発的に調べたり、地域のことを考えたりする活動「マイプロジェクト」がある。生徒たちが昨年度から「通信制高校について知ってほしい！調べている」と充実した様子で話

している。ロジエクトを始め、4月から卒業生や斉藤さんら4人が週1回話し合い、情報発信に向けたポスター作りを進めている。出来上がったポスターは中学校や図書館など中学生が見る場所に張り、不登校などで悩む子や保護者に知らせたいと考えている。

メンバーの2年、佐藤宏樹さん（16）は「友達もでき、楽しんでるんやないか」と取り組んでいる」と充実した様子で話

通信制高校の存在、価値を社会に正しく知ってもらいたい。その思いは学校側も同じだ。第一学院では、毎週1回、医療関係者や公務員といったさまざまな分野の人を招き、経験を聞く授業がある。コミュニケーションが苦手な生徒もいることから、講演の後は必ず3、4人に分かれて感想を共有する。

担当教諭の吉山直登さん（26）は「さまざまな人の価値観に触れるだけでなく、対話を通して自分の気持ちを他人に伝える経験を重ねてほしい」と語る。

生徒の進路選択や社会に出た時のことを考えての取り組みだが、地域とのつながりを増やすことで「通信制に通う生徒のことを広く知ってもらいたい」との思いもある。

吉山さんは「学びの形式にとられず、生徒の個性や多様性を尊重し、生き生きと活躍できる社会になってほしい」と願う。生徒たちが「自分らしい未来」を見つけられるように、（14日付でインタビュー掲載）

なりたいたい自分考える

就職、進学…将来へ

文部科学省の調査では、2021年度の通信制高校の進路は、大学進学率が全国で23・1%（公立14・0%、私立24・5%）、就職が15・0%、専修学校が23・7%だった。本県は大学19・1%、就職14・4%、専修学校34・2%。10年前（11年度）と比べ、大学進

学率は全国で約6割、本県で約10割それぞれ上昇している。通信制高校でも進路指導として、進学や就職のガイダンスを実施している。担当教員が相談にも応じるが、通学機会が少ない分、生徒が自発的に動く必要がある。仕事と学業を両立する生徒が多かった昔と違い、10代

の生徒が大半のため、キャリア支援に力を入れる学校は多い。県立高田南城高（上越市）では、2年前から進路選択に向けた基礎知識を伝える授業を実施する。

6月上旬の授業では、担当の児玉悟教頭（47）が大学や専門学校の特徴を解説した「写真Ⅱ」に参加した7人の生徒に、「将来なりたいたい自分に必要なものは何かを考えることが大事」などと語りかけていた。

